



The role of L1 and L2 orthography on loanword phonology

Kwon, Yeonjoo

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6031号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006031>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

The role of L1 and L2 orthography on loanword phonology

(外来語音韻論における L1 と L2 つづり字の役割)

氏 名 : 権延姝

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 田中真一 准教授
(副) 岸本秀樹 教授
(副) 菱川英一 教授

韓国語の中には外国語から借用された語彙が多い。20世紀に入ってから西洋から入った語彙が多く、その中でも英語からの外来語は全体の5%を占めていて、今も増えつつある。英語からの外来語の特徴は一つの音素が複数の韓国語音素に借用されるところにある。例えば、英語の母音[a]は韓国語に借用されるとき、英単語'gas'からは/a/で(/kasi/)、英単語'gag'からは/e/で(/kegi/)借用される。このような借用によって、英語では一つの単語が韓国語の中で二つの形で借用されることもある。例えば、英単語のshotの借用がそうである。この単語は韓国語では/syat/または/syot/と借用されているが、この二つの単語の間には意味、または使い方の違いはない。

本論文の1章は韓国語の借用語の問題点の指摘から始まる。続いて本研究が扱う主題である外来語の定義について、codeswitchingとの比較を通じて説明し、論文の全体的な構造を概略する。先行研究をまとめた2章は3つに分かれている。2.1では外来語音韻論を扱った先行研究をその立場から、音韻中心の見解(Bloomfield 1933; Weinreich 1953, 1957; Hyman 1970; Lovins 1975; Danesi 1985; Ulrich 1997; Jacobs & Gussenhoven 2000 among others)、音声中心の見解(Silverman 1992, Shinohara 1997, Kang Y. 2003, Peperkamp & Dupoux 2003, Vendeline & Peperkamp 2004, Oh & Kim H. S. 2006)、綴り字中心の見解(Iversion 2005, Vendelin & Peperkamp 2006, Smith 2006, Detey et al. 2007, Kang 2009)と3つに分けてまとめた。まず音韻中心の見解は、完璧な二重母語話者が音声隔着てないで直接音素から音素へ借用すると主張する見解だ。しかし、この見解では同じ音素が、L2によって異なる音素として借用される現象が説明できない(Shinohara 1997)。2番目の音声中心の見解は、外来語はL2の入力を物理的に一番近いL1の音として借用することで形成されると主張する。この説明は音韻中心の見解が持つ問題点を説明することができる。しかしながら、この見解は同じ音声で語によって異なる形で借用される語例が説明できない(Cho 2009)。最後にあげられる綴り中心の見解は、文字に基づく借用を主張する。文字借用を考慮に入れると、音声要因で説明できないところが説明できる(Vendelin & Peperkamp 2005)。続く2.2では韓国語の音韻体系を先行研究を用いてまとめ、また2.3では英語を韓国人がどう聞き取るかを先行研究のデータに基づいてまとめた。2.2と2.3は3章から5章までに渡る韓国語の外来語に関する分析の基盤となる。

本研究では知覚実験と実在語の分析によって、外来語の母音の借用のパターンを調査した。3章では、入力を音声だけに制限した時の、借用のパターンを聴覚実験で確認した。刺激に使われた英語の音声はアメリカ人の英語母語話者によって録音した。刺激語は英語の母音が一回ずつ、また英語の母音のつづり字を一回ずつ含むよう、実在語の英語の単語から選ばれた。例えば、英語のaのつづりとしては'a, e, i, o, u, y'が全て生起可能なので、[a]の単語はacademic, academy, communication, accordion, curator, adventure, dribbleが選ばれた。被験者は韓国人で正規教育以外に外国語の経験がない韓国人のソウル方言話者が参加した。被験者が英単語をそのまま聞くと、刺激の解釈の際に韓国語外来語を参照する恐れがあると考えられるため(Kang, S.M. et al. 2012)、CVC, VC, CVの形で被験者に提示した。例えば、英単語alcoholからは[al], [kah], [hol]の3つの刺激が得られた。

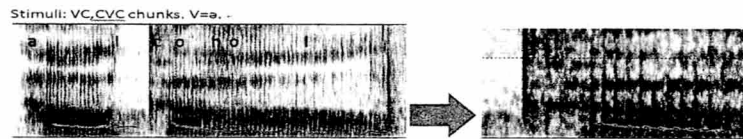


図 1 刺激語の編集—聴覚実験

被験者は CVC, CV, もしくは VC の音声刺激を聞き、韓国語の一番似ている母音を選ぶよう指示された。23 個の刺激が 2 回ランダムで提示される実験に 13 回参加してもらい、598 個の返答を得ることができた。結果は 58% が先行研究と一致していた。先行研究と一致しない結果は英語の [a], [ɔ], [u] の場合に観察できた。

English	[i]	[ɪ]	[u]	[ʊ]	[ɛ]
Korean	ㅣ /i/	ㅏ /e/ ㅣ /i/	ㅓ /u/	ㅜ /u/	ㅓ /e/
	100%	38% 27%	42%	92%	88%
	[ə]	[ɔ]	[æ]	[ʌ]	[ɑ]
	ㅓ /ə/ ㅣ /i/	ㅓ /a/ ㅏ /e/	ㅓ /ə/	ㅓ /a/	ㅓ /ə/
	43% 26%	92% 100%	96%	50%	50%

表 1 韓国人の英語母音の知覚—聴覚実験の結果

4 章では文字を刺激とした視覚実験を行った。聴覚実験で使われた同じ単語が使われた。ただし、視覚実験では文字という形で被験者に提示され、音声刺激は与えられてなかった。また英語の単語は全体の単語を見ない限り母音の音質が判断できないことから、視覚実験では英単語が単語全体で提示された。

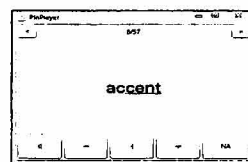


Figure 1 視覚実験の画面

4 章の結果は聴覚実験の結果との比較することで分析が行われた。両実験の結果が見せるパターンから予測値を計算し、それを実在語からの実測値と比較して、どちらのほうが実測値をよりよく予測しているかを求めた。結果は文字を用いた実験のほうが聴覚実験より実在語をより正確に反映しているということであった。この結果から文字の影響が、外来語の借用において、音声ほど強いこ

とが確認できた。

5 章では韓国語コーパスから英語からの外来語を抽出し、分析の対象とした。[英語の発音]–[英語のつづり字]–[韓国語母音]のセットを作り、まとめた。例えば、英単語 accent は韓国語に /eksentʰi/ と借用される。この単語から表 1 のような二つの [英語の発音]–[英語のつづり字]–[韓国語母音]のセットを得ることができた。実在語の分析に使われたセットの総数は 3918 例であった。

英語のつづり字	英語の発音	韓国語
acc	[æk]	액 /ek/
ccent	[sənt]	센트 /sent/

表 2 実在語の分析

3918 例からも、一つの英母音が複数の韓国語母音に借用されることが確認できた。一つの英語母音を借用するために用いられる韓国語の母音の数は、1 つ [u] から 9 つ [a] までであった (平均 5.1 個)。結果分析は文字借用と音声借用を共に考慮に入れて行った。音声借用と文字借用で借用パターンを分析すると、全体的には音声と文字が共に作用していることが分かった。

	音声借用	音声借用ではない	
文字借用	1316 (34%)	1094 (28%)	2410 (62%)
文字借用ではない	1332 (34%)	176 (4%)	1508 (38%)
	2648 (68%)	1270 (32%)	3918 (100%)

母音別には [i], [ɛ], [ə], [æ], [ə] の場合、音声と文字が共に借用に影響していた。[ə] は分析の前に [英語の発音]–[英語のつづり字]–[韓国語母音] のセットでまとめる際に発生したパターンで、英単語には母音の綴り字があるが、その発音は [ə] であったり、まったく発音されなかったりする場合がある。[ə] は [a] とは借用のパターンが違っていたので、[ə] とは別のケースとして扱った。他の母音の場合、音声のほうが強く働くものも、文字のほうが強く働くものもあった。母音 [u], [ʊ], [ʌ] に関しては音声の影響が強く、これらの母音の借用は音声だけでも説明できるものであった。文字の影響が強い場合は [a] と [ɔ] があった。

このような母音による、音声と文字の影響の差は英語の中でも文字と音声の関係にあることが見て取れた。英語の綴り字と音声が、同じ韓国語母音としての借用に働く場合、音声借用が強い傾向にあった。

英語の発音	[u]	[o]	[ʌ]
頻度が最も高い英語の綴り字	'u'	'u'	'u'
発音に基づく借用	ㅏ/u/	ㅏ/u/	ㅏ/a/
文字に基づく借用	ㅏ/u/	ㅏ/u/	ㅏ/u/
実在語で頻度が最も高い借用	ㅏ/u/	ㅏ/u/	ㅏ/a/

表 3 音声借用が強い英語の母音

それに比べて文字の影響力が強い母音には、英語の文字と音声と異なる方向で作用しているという傾向が見えた。

英語の発音	[a]	[o]
頻度が最も高い英語の綴り字	'o'	'o'
発音に基づく借用	ㅏ/a/, ㅏ/a/	ㅏ/a/
文字に基づく借用	ㅏ/o/	ㅏ/o/
実在語で頻度が最も高い借用	ㅏ/o/	ㅏ/o/

表 4 文字借用が強い英語の母音

本研究が扱ったコーパスの中にも一つの英語の単語が複数の韓国語に借用されるバリエーションが英語の 8 つの単語においてあった。このようなバリエーションは、音声だけでは説明できなく、文字借用を考慮に入れることで説明できた。借用語においては全体的なパターンについても、また個々のバリエーションについても文字借用による分析で、説明力が高くなることが分かった。

聴覚実験の結果では一つの母音が少なくて 1 つ(英語の [i]、[u]、[æ]、[ʌ])、多くて 4 つ(英語の [i]、[u]、[æ] の場合)の韓国語の母音に借用されていて、実在語よりはブレが少ないパターンを見せた。このような結果を踏まえて、実在語に音声以外の何かが作用していることを確認できた。

さらに、実在語と聴覚実験の結果を比較し、英語の母音が一つに母音に偏って借用される場合と、そうでない場合に分けて分析した。一つの韓国語の母音に借用が偏る場合にも、実際の母音との関係を持つかは断る場合があった。例えば、英語の母音 [o] は実在語では 89% で /o/ で借用されたが、聴覚実験では 92% が /a/ で借用された。英語の母音 [i] は実在語では 93% が /i/ で借用されたが、聴覚実験では 27% だけが /i/ として借用されていた。全体的な傾向だけでなく、このような個々の例からも、実在語のパターンと聴覚実験の結果が一致しないことが分かった。以上から実在語には音声以外の要素が働いていると判断できた。

続く 6 章では音韻論以外の分野から、文字と音声の関係を見ることで、文字に基づく借用が自然であることの根拠を求めた。心理学的研究からは文字と音声とが言語の二つの入力であることを (Gazzaniga et al. 2002)、また音声と文字が共に提示された実験で文字のほうが、音声刺激より長く正確に被験者の記憶に残るということを報告している先行研究を紹介した (Colavita and Weisberg

1979, Kim and Min 2009)。外国語教育から明らかになっている学習者のエラーの中にも、文字の影響によるエラーは珍しくないことであった (Celce-Murcia et al. 1996)。

今までは外来語の音韻論は音声と音韻に解釈の見解が分かれていた。本研究では知覚実験と実在語を共に扱うことで、実際の聴覚と実在語が一致しないことを数量的に確認した。この不一致から、実在語に聴覚以外の要因が働いていることを確認した。また、実在語の分析において英語の綴り字を考慮することで、聴覚で説明できない借用のパターンが綴り字で説明できることを確認した。このような結果から、外来語を扱う研究では音声だけでなく綴り字も、外来語の形成に影響していることを願慮に入れる必要があると考えられる。

論文審査の結果の要旨

氏 名	權 延姝
論 文 題 目	The role of L1 and L2 orthography on loanword phonology (外来語音韻論における L1 と L2 つづり字の役割)
要 旨	本論文は、借用語音韻論における綴り字（表記：orthography）の役割とその重要性について、とくに英語から韓国語に借用された外来語における、母音の変換パターンの分析を通して論じたものである。借用語音韻論の主要な研究（Bloomfield 1933, Hyman 1970 等）において周縁的なものとして扱われてきた表記という要素が、借用側の言語（L1）においても、また、借用される言語（L2）においても重要な役割を果たすことを、音声知覚、文字知覚、実在借用語の三つの調査によって得られたデータの統計的、数量的比較に基づいて実証している。 論文は7つの章から構成されている。以下では各章の内容を紹介しながらその主張と内容を検討する。 第1章では提出論文の構成と目的、および、論文で扱われる借用語の定義について述べられている。 続く第2章は、借用語に関する議論において依拠される三つの見地、すなわち、(1)音韻論の見地（Bloomfield 1933, Hyman 1970, 他）、(2)音声学の見地（Silverman 1992, Shinohara 1997, 他）、(3)表記の見地（Iversion 2005, Kang Y. 2003, 他）それぞれの特徴と問題点をまとめ指摘している。その上で、とくに(3)の表記の見地の重要性について、表記の観点のみから説明される事例（Vendelin & Peperkamp 2005 等）を援用しながら指摘している。章の後半では、借用側の言語である韓国語の音韻体系についての先行研究をまとめ、さらに韓国語母語話者による英語音声の聞き取りについての先行研究を概観することにより、後に展開される、英語から韓国語に借用された外来語に関する議論への橋渡しとしている。 第3章、第4章、第5章は、本論文の中心を成す部分である。まず第3章では、韓国ソウル方言母語話者による英語音声の知覚について分析がなされている。アメリカ英語母語話者により発音された英単語の中から、母音を含む音連続（CVC, CV, VC）の部分のみを切り取り、その母音部（V）が韓国語のどの母音と最も近いかを強制選択させることにより、韓国語における音声情報にもとづく母音借用の実態を提示している。分析では、第2章で確認された先行研究のデータと概ね一致を見せること、しかしながら同時に、とくに[i], [a], [ɑ]の三母音において、先行研究とは異なる知覚結果の見られること、また、そのうちの二つを含む[i], [a], [u]において、知覚にゆれが多く観察されることを報告している。この章は、続く第4章とともに、第5章以降で展開される議論の基盤としての役割を担っている。 続く第4章では、文字を刺激とした知覚実験が行われ、第3章の聴覚実験のデータとの比較が試みられている。前章と同じ語が、ここでは文字という視覚情報のみで被験者に提示され、韓国語のどの母音として借用されるかを分析している。その上で、約6割が聴覚実験の結果と一致するものの、残る約4割において両者の不一致が見られることを報告し、このような不一致の生じる点において、表記が借用に対し一定の役割を果たしているとの主張を行っている。また、とくに英語の曖昧母音/ə/の知覚にバリエーションが観察され、それらの例が英語の綴り字と一致することから、この部分においても、表記が借用に関与するという知見が提示されている。 第5章では韓国語のコーパスから、英語由来の借用語に含まれる母音について、(1)英語の発音、(2)英語の綴り字、(3)対応する韓国語の母音、の三者の対応関係を詳細に分析することにより、また、それらを第3章、第4章の結果
主 査 記 載 氏 名 ・ 印	岸 本 秀 樹

と比較することにより、母音借用のメカニズムの解明を試みている。借用には総じて音声情報と文字情報がともに作用し、全体値においては音声による説明力の方が高いことを認めながら、その一方で、英語の母音の種類により(1)音声と文字がともに関与するもの（[i], [e], [a], [æ], [ə]）、(2)音声のみが関与するもの（[u], [ɔ], [ʌ]）、(3)文字のみが強く関与するもの（[ɑ], [ɔ]）の三つに分類できることを指摘している。また、第3章で分析された聴覚実験との比較において、借用元（英語）に対応する借用側（韓国語）の母音の選択幅が、聴覚実験においてよりも実在語において大きいことを提示している。このことと、上記(3)の借用パターンの存在から、借用に音声以外の要素、つまり、綴り字が関与することを指摘している。本章は、実在語における借用パターンが、聴覚実験および視覚実験で得られた結果との比較から検討され、多角的な議論の展開されている点において大いに評価できる。その一方で、音声情報と文字情報のずれに関し、上記(1)～(3)のような分布が観察される理由について検討されていないのが残念な点である。

第6章では、第3章から第5章に至る知覚調査と実在借用語の関係について、独自の統計手法を用いることにより再検討している。第3章で得られた聴覚実験と、第4章で得られた視覚実験それぞれの結果が見せるパターンの比率に基づき予測値を計算し、それを第5章の実在借用語のデータによる実測値と照らし合わせることにより、聴覚（音声）、視覚（表記）いずれが実測値をより高く予測しているかを求めている。その上で、第5章で得られた結果とは逆に、視覚情報の方が聴覚情報よりも、実在語の分布を正確に反映すること、それにより、韓国語における外来語の母音借用において、綴り字の影響が音声の影響よりも強いということを主張している。この章において提示された分析手法は、借用語音韻論における分析に対して貢献が期待でき、評価に値するものと言える。

第7章では結論と課題について述べられ、論文が結ばれている。

以上見たように、本論文の評価すべき点について次のようにまとめることができる。第一に、一般音声学、借用語音韻論、韓国語・英語音声学、心理言語学等の広範囲な先行研究を理解し研究に結びつけていること。第二に、聴覚実験および視覚実験によって得られたデータを実在語のデータとリンクさせながら、多角的な分析を試みていること、また、とくに二つの実験による予測値と、実在借用語の実測値との関係に基づく独自の分析手法により、借用語音韻論の分析への貢献が期待できること。第三に、とくに韓国語音韻論の分野において、英語曖昧母音の借用パターンをはじめとする、新たな事実を提示している点が挙げられる。その反面、本論文は、上記の理論展開の根拠となる実験の設定、議論の明確性、および英文の正確さに関して問題が散見されるのも事実である。しかしながら、本論文が関連分野において新しい知見を提示した意欲的なものであることには疑いがない。

以上に鑑みて、本審査委員会は全員一致で論文提出者、權延姝が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	岸 本 秀 樹	副 査	教授	松 本 曜
副 査	准教授	田 中 真 一	副 査	国立国語研究所・教授	窪 田 晴 夫
副 査	別府大学・講師	竹 安 大			